

17、 唯除と若不

第十八願の御文は「設我得仏十方衆生 至心信樂欲生我國 乃至十念若不生者不取正覺 唯除五逆誹謗正法」この御文の上に光明の智慧と寿命の慈悲とが如何に働いてゐるか。光明に照らされておりながら自惚が強い為に、自分が除かれた張本人である事を知らないのだ。だから実地に助かつた事も知らないのだ。十方衆生よ、自惚れなよ。除かれたのは誰だ。あの八文字を、あれは抑止門だと學問で片付けてゐるが、誰が五逆を造つてゐるのだ。誰が謗法を侵してゐるのだ。未造業の者は抑止、已造業の者は摂取するのだ。そんな大空の星を竹箒で掃くような噂話をしなさんな。自分が現行犯である事に気が付かないのかい。気が付かない筈だよ、死後の夢物語ばかりしてゐるのだから、教える人が気が付かないのだから、聞く人にどうしてその自覺が有り得よう。五逆を造らない者が十方世界の中に一人でもゐるか。若しいないとしたら法蔵菩薩の見込が外れるのだ。自分が素直に聞いていると自惚れてゐるのが僣慢の親玉だ。

父を殺し母を殺し毎日が修羅道の日暮が自分である事に気が付かないのか。養子に行つた人、嫁に行つた者、両親が邪魔にならなかつたか。物を言い付けられた時毒を含んではないか。返事する時針を含んではないか。病気の看護をする時刃を突き付けてはいないか。日々夜々幾度殺しているか判らないのにそれでも素直な人間と思つているのかい。宗教を聞く資格がないのだ。仏身より血を流すと云う身を心に置き替へたらどうなるのだ。宗教を説きながら宗教を味わいながら因果の道理を無視した行いより出来ないではないか。仏心より血を流している相ではないか。謗法とは無宗教の人間が謗法しているだけと思つたら大間違いだ。

大集経にときたまふ

鬪諍堅固なるゆゑに

有情の邪見熾盛にて

念仏の信者を疑謗して

五濁の時機いたりては

この世は第五の五百年

白法隠滞したまへり

叢棘刺のごとくなり

破壊瞋毒さかりなり

道俗ともにあらそいて

念仏信ずるひとをみて

疑謗破滅さかりなり

同行は聞きながら小言を言い、僧侶は説きながら悪口を言う。僧侶よりも同行に進んだ者が多いのだ。参詣の少いのは時期や程度に合わないのだ。群参しているのは浪花節よりは安くて面白いから集まるか、時期に相応しているかだ。人の批評するよりは自分の特長を發揮すればよいのだ。悪口を言えば人が讚めるかと思えば大間違いだ。却つて人格のない事を証明しているのだ。十方の有情一人として逆謗の屍でない者はいないのだ。若しないとすれば法蔵菩薩は願行を成就し替えなければならぬのだ。五劫思惟の古に有漏の凡夫の腹底を見抜かれた時、世出世の最低の悪は逆謗の屍である事を見抜いて願行を成就されてあるのに、素直な者と自惚れていては函蓋相応しないのだ。

調熟の光明のお育てにより調機誘引されて、素地のまんまが照らし出された時、唯除逆謗と除かれた屍が自分であった事に気がつくのだ。

寿命無量の慈悲は、生死流転の恐ろしさを除いて永遠に迷わぬ悟を開かすと言う程

仕合せが有るだろうか。慈悲の極致は転迷開悟である。その慈悲が逆謗の劣機に向つた時に 若不生者不取正覚と顛れて来るのだ。若の一字は生まるる者が生まるるのではないのだ。「生るべからざる者を生れさせたればこそ 超世の悲願とも横超の直道とも習いはんべれ」と言つてあるが、自分は生まるべからざる者と言う自覚があつたか。生まれさして頂いた自覚が有つたか。皆観念で合点しているだけではないか。死んで生まれられるか。それが根本の間違いなのだ。死んで生まれる宗教なら死物だ。生きている今生かされた宗教が生きた宗教だ。それを 平生業成とも 現生不退とも 体失往生とも 言つていのではないか。「はい」と 素直に合点する位の善人なら阿弥陀様も若の一字をつけらるる筈がない。難化の三機、難治の三病が 阿弥陀様と一騎打ちをするから「難中の難これに過ぎたるはなし」と切り墮とされているのだ。その逆謗の屍を 若の一字に正覚を掛けて切り込む親の腕前に 至心信樂 己を忘れて南無阿弥陀仏と嘖き出るので。その切れ味は合点や学問の遠く及ばない処だ。光が来てから闇が逃げるのでもなければ、闇が去つてから光が来るのでもない。墮ちてからお助け

でもなければ
の味だ。

お助けに預かってから
落ちるのでもない。

親に逢うたら
判る。

一念同時